

札幌彫刻美術館友の会会報

いづみ

第 17 号

2006 年 10 月 1 日発行

(題字: 國松 明日香氏)

本郷新彫刻シリーズ 17



「風雪の群像」

旭川市常磐公園 (5 人群像 高さ 230 ㌢)

北海道開拓記念碑として 1970 年に建てられたが、72 年 10 月、爆破により 5 体のうち 3 体が破壊された。スケッチの構想段階でアイヌ研究会の目にとまり、アイヌがひざまずいているのは蔑視だと問題にした。爆破 2 年後の 74 年 3 月、地元と風雪の群像を作る会の要請を受けて再建された。爆破は後に東京三菱重工ビル爆破事件で逮捕された「狼」グループの犯行と判明した。

(文・写真 仲野 三郎)

目 次

本郷新彫刻シリーズ 17 「風雪の群像」	表紙
目次 彫刻美術館行事予定	2
荒井記念美術館が目指す 入館者数より一人の感動	竹村資子 3
本郷新の野外彫刻を調査しての雑感	土岐美由紀 4
クリストとジャンヌ＝クロード夫妻の作品を追って	加藤玖仁子 6
彫刻美術館で出合った本郷新の希少美術品「打つ」	望田武司 8
「空間に生きる一日本のパブリックアート」展に寄せて	樋泉綾子 9
オマージュ「無辜の民」北の彫刻展に出品して	艾沢祥子 10
本郷新のちょっといい話 5	仲野三郎 11
抜海の日	12
アトリエ訪問 芸森バスツアー	13
野外彫刻清掃作業 友の会の提言 展覧会ほか	14

札幌彫刻美術館展覧会・行事予定（10月—12月）

本館	記念館	散策と美術鑑賞の会	教育普及事業
展示替えのため臨時休館 10月10日—13日 平成18年度後期収蔵品展 新制作展と本郷新 10月14日—3月25日 本郷が1928年に初入選した国画会から、74歳で亡くなるまで作家活動の拠点となった新制作展に出品した作品から制作の軌跡を見る。	平成18年度後期収蔵品展 素描展パート5 10月14日—3月25日 本郷の未公開素描展として飛行機の中から見た四国、九州の風景や鹿児島島の風景を展示	10月21日(土) ステージⅣ 「三角山と大倉山の縦走」	10月14日(土) 15日(日) 造形教室 （テラコッタ） 11月3日(金) 宮の森サンクスデー （市民無料開放） 秋のコンサート 12月23日(土) クリスマスコンサート

（財）札幌彫刻美術館 札幌市中央区宮の森4条12丁目 ☎011-642-5709

◇開館時間：午前10時—午後5時◇休館日：月曜日（月曜日が祝日などの場合は翌日）

◇交通機関：地下鉄東西線「西28丁目」駅下車 ジェーアール北海道バス「環20」

山の手環状線3番乗り場、「彫刻美術館入り口」下車、徒歩10分

入館者数より一人の感動

財団法人荒井記念美術館学芸員 竹村 資子

美術館設立由来

荒井記念美術館は平成元年、後志の岩内町に美術・音楽・その他の芸術文化の普及振興を目的に、当初は私立美術館として出発しました。創設者荒井利三は、出版卸売業のかたわら文学に親しみ有島武郎の小説「生れ出づる悩み」への深い感動から、主人公のモデルであった木田金次郎が生涯を過ごしたこの町に美術館建設を構想し、ピカソの版画コレクション、郷土出身の画家西村計雄、「生れ出づる悩み」をテーマとした道内ゆかりの作家たちの作品を軸に、自然と芸術の響きあいを目指した美術館運営を目指しています。

美術館の現状

「1,000 人の入館者よりも、1 人の感動を」そんな創設者の信念のもと、開館から18 年が過ぎました。北海道の多くの美術館がそうであるように、確かに開館当初から比べると、当館でも入館者が減少しています。しかし、これは逆にチャンスであると思っています。東京や大阪で人気のある展覧会に行ったことがありますか？ 入館前から美術館の前に並び、会場に飛び込んでも、あっという間に人だかり、遅々として進まず、また好きなところでゆっくり立ち止まることもできない行列に並んだり、人のすきまからのぞくようにして作品を見学

することも少なくありません。数字で言えば、当館の一年間の入館者がたった3 週間あまりで達成されたりと、びっくりいたしますが、お客様は本当に満足されているのでしょうか？

都会からいらっしゃるお客様の多くが「思いがけず長居をしてしまった。」「ぜいたくな時間をすごせた。」「素晴らしい美術館ですね。」などとおっしゃって下さいます。

美術館から見下ろす岩内の町並みと日本海、2 万坪の敷地にはホテルやテニスコート、そして日本庭園には安田侃や道内ゆかりの作家たちの彫刻を、春は桜並木を楽しみつつ、夏は青い空と緑の匂いに包まれて、秋は燃えるような紅葉を愛でて…世俗を忘れ、時間と心に余裕を持って楽しんでいただけてこそ、当館の本当の魅力が味わっていただけていると思っています。お客様が「私だけの特別な美術館」と感じてくださるような、「隠れ処美術館」なんて、ちょっと素敵じゃありませんか？

未来への展望

「1,000 人の入館者より 1 人の感動を」この創設の理念を守り、感動を生み出していく生きた場所になるべく、お客様一人ひとりの満足度を上げることこそ、魅力ある美術館づくりの一步だと思っています。

本郷新の野外彫刻を調査しての雑感

土岐 美由紀（北海道立近代美術館学芸員）

難しいデータ収集

昨年度から札幌芸術の森美術館での研修の機会を得、同館着任後、初めて彫刻展を担当した。「生誕 100 年本郷新展」である。期待と不安の入り交じる中、開会目前の展覧会準備に没頭した。

全長 4 メートルの巨大石膏像の移動など、展覧会の実現にはさまざまな難題が待ち受けていたが、中でも、図録制作にあたって担当した本郷の野外彫刻目録の編集は予想以上の大変さであった。この作業は、札幌彫刻美術館より基礎データをいただいていたから、かなり恵まれたスタートであったにもかかわらず、である。

目録は本郷が生前に設置した野外彫刻の写真とデータを掲載。データ項目は作品名、制作年、設置年、設置場所、寸法、材質という至ってシンプルなものであるが、展覧会のオープンに間に合うかどうか危機的なほど、調査に時間を要する事態となった。休日の自宅や携帯電話にまで、全国の都道府県の管理担当者から電話やファクスをいただくことになる。そこでつくづく実感したのが、野外彫刻に関するデータ収集の難しさである。

まず、彫刻の設置者、そして現在の管理者、所蔵者が誰であるか、これがなかなかわからない。さらに、判明した所管先の職員に、目前に本郷新の彫刻があることを認識していただくまでに、かなりの時間を要する事さえあった。行政機関や民間企業において、次々に替わる担当者が所管するエ

リアに恒常的に設置されている彫刻に関心を寄せ、熟知するのは確かにたやすいことではないだろう。そして保有データについては、画像を含めた先述の基本項目が揃わないケースが多く、担当者の方々が改めて写真撮影や採寸をしてくれた。採寸と一口にいても、巨大な野外彫刻の場合、手間ひまかかる大仕事である。また、担当者やデータの所在探しの難航ぶりを見かねた市の観光課の方などが、親切にもそれらの作業を代行してくれることさえあり、そのお陰である目録が出来上がった次第である。

変化する彫刻

苦労話を始めるとついつい力がいり、焦点がぶれてしまいそうだが、この調査によって認識したのは、全国的に設置年数の長い野外彫刻については、設置の経緯や、寸法・制作年などの基本的なデータが整備されていないケースが多いということ。さらに野外彫刻は素材の劣化や都市開発などによって、素材や設置場所の変更、さらにはそうした経緯に伴う作品名や形状の変更も珍しくはないということである。彫刻の研究を専門とされている方なら、これらは当たり前のことかもしれないが、私にとっては驚きであった。

そして今回の調査で最も残念だったのは、本郷の最初の野外設置作であり、かつまた東京初の野外設置彫刻とされる（＊1）《汀のヴィーナス》（昭和 25 年）が現在行方不明になっていることである。戦後間もなく、上野駅前を飾った記念すべき裸婦像は、人

造大理石からブロンズに材質を換え、昭和58年まで、習志野市の谷津遊園にあったことがわかっているが、その後どのような運命をたどったのか、ついに知る事はできなかった。

時の流れのなか、街並の変化に伴って野外彫刻も変化するのは自然なことだといえよう。しかしその中で、基本的データの記録が軽視されているのは否めない。個人蔵の作品ならまだしも、公共的な場所にある作品の正確な変遷もわからないという事態は避けたいものである。

情報集積への市民の関わり

本郷新の場合、札幌彫刻美術館という研究母体があることはきわめて心強いことだが、そのバックアップという意味でも、野外彫刻をめぐる「情報」の集積に関して、市民レベルで直接、間接に寄与できる可能性があるのではないかと、最近、すでに展開されているさまざまな活動から強く感じている。それは作品の画像情報や作品名などの基礎的な事項にとどまらず、例えば、汚れ具合や痛み具合の情報なども、である。こうした点は市民にとって自然と気になるところではないだろうか。一点の作品の愛好という視点からばかりではなく、その作品のある環境そのものへの美意識は多くの人々が持つはずである。

例えば、「旭川彫刻サポート隊」の活動。札幌芸術の森美術館の樋泉綾子学芸員の調査によれば、この市民ボランティアの会は彫刻の簡易な手入れ（清掃）を実施すると同時に、作品の劣化状態などの情報を旭川市彫刻美術館へ報告しており、それが彫刻の修復計画等に反映されているということである。

課題だらけの作品修復

作品の修復というのは意外と難しい。美術館で長く修復担当をした経験からいえば、修復にはさまざまな考え方がある。経年劣化や損傷の修復においても、目標を現状維持とするか、制作当初の状態への復元とするか。いずれの場合も、その具体的方法における選択肢も多い。また、タイミングという問題もある。部分劣化を抑えるための処置で作品全体にストレスをかける場合もあることから、長期的な保存を踏まえた修復時期の判断が必要である。

野外彫刻の場合、設置環境が厳しいだけに経年変化が著しいケースも多い。サビなどによる変色の質（良質、悪質）を見極めなければならないし、また経年変化を味わいととらえる考え方も当然あるわけで、作者の意図も十分汲み取りながら、メンテナンスはなされなければならない。専門家や作家（著作権者）、管理者間できちんと協議されなければ、修復はできないということだ。

それにしても、修復の前提となる作品状態の把握は極めて重要であり、その細やかな情報の収集に市民の手や目に関わるのは、パブリックスペースにある彫刻本来の意義からみても喜ばしいことだろう。

とりとめのない話をつづっているうちに紙面が尽きてきた。ともかく、本郷展に携わって認識した野外彫刻をめぐる諸相。札幌芸術の森美術館での「空間に生きる—日本のパブリックアート」展の開催を機に、視野を広げつつ、その考察を深めたいと思う。

（＊1）井上みどり氏「生誕100年本郷新展」図録テキストによる。

「クリストとジャンヌ＝クロード夫妻の作品を追って」

加藤玖仁子（美術評論家）

2006 年 4 月 2 日、札幌の阿部典英氏と新設なった宮の森美術館の村田隆氏より電話による依頼を頂く。4 月 7 日夕の開館記念レセプションで、クリストとジャンヌ＝クロード夫妻に関する秋の企画発表が行われる際に、15 分間のスライド・トークを祝典への饞として準備する旨快諾した。さらに 8 月 19 日、札幌彫刻美術館友の会より本誌への寄稿依頼の電話があった。当地での芸術家夫妻と作品・制作姿勢への期待は大きく、温かい。他館の行事であっても、同地区にある会として広めたいとの趣旨を承る。

夫妻の作品を追って 30 年、さまざまな場面・人々が懐かしく脳裏を去来する。

クリストの初来札は、1970 年代夫妻を敬愛してやまない東京銀座の南画廊主・故志水楠男氏の尽力で実現した。当時、米国の学術文化交流の窓口であったアメリカ文化センターに集まった人々は、1972 年完成の、4 トンのオレンジ色の布（110×410m）をコロラド峡谷から吊り下ろしたくヴァレー・カーテン>や、カリフォルニアの 50 余りの牧場を縫うように走った 1972-76 年制作の<ランニング・フェンス>（5m×4km）の、未曾有の芸術のあり方に圧倒され、興奮状態だった。

その後、実地見学と作家対談に基づく研究論文を講談社や京都書院刊行の学会誌・専門誌に発表してきたが、芸術家ご夫妻はもとより志水氏・原美術館長・佐谷画廊主・草野眞男氏、W.フォルト氏、J.クラフト氏、H.ヘファリ女史、R.ベーム氏より、迅速な対応で支えて頂いた。

南画廊・佐谷画廊・ヒルサイドギャラリー・水戸芸術館・札幌芸術の森等、クリストとジャンヌ＝クロードの作品展が日本各地で次々と開催さ

れるようになり、日米同時に実現した<アンブレラ>が、1340 本茨城県に開いたのは、1991 年のことだった。IBC（茨城放送）の実況録音のため、要所でコメントを述べながら「傘」の流れに沿って移動する。早朝から畦道に立つ傘の土台を点検するパジャマ姿。沿道で見学者に作品解説をする素朴な茨城訛りの声。青い傘の間に見え隠れする黄色い帽子は登校する一年生の集団だ。激流をものともせず白波の只中に微動もせず立ち続ける傘、傘、傘。背後には水を含んだ樹林と峰々が周辺に霞をたなびかせて広がり、作品の青さを一層引き立てる。一本一本が生活の場・地球の自然の中に点となって分け入ることで、人々の心を開き、地上の美しさへと視線を誘う。マイアミの<囲まれた島々>、パリでの<ポンヌフ梱包>を経て、クリスト夫妻は再び創造上の新境地を開拓し、その歓びを人々と共有する。

24 年の歳月を要し 1995 年に完成したベルリンの『梱包された国会議事堂 1971-1995』は、20 世紀を締め括る歴史的芸術的出来事だった。他方、21 世紀の開幕を告げたのが昨年実現した『ザ・ゲイツ、セントラル・パーク、ニューヨーク・シティ 1979-2005』と言えよう。

「第 211 回ドイツ連邦共和国国会で、賛成 292、反対 223 で、『国会議事堂梱包』が承認されました」とのファクスがジャンヌ＝クロード夫人から届いたのは、1994 年 2 月 25 日だった。

それまで芸術家夫妻は 40 数回当時の首都ボンとニューヨークを往復して、梱包の許可を得るため、ドイツ連邦国会議員の説得に努めていた。ニュールンベルクでの[人権の道]完成の式典とシンポジウムに招かれていた筆者は、その後ボンで

開催中の「包まれたボンヌ展」を見学し、下見のためベルリンに立ち寄ることを書き送ってあった。夫人はボンでの夫妻の宿泊先を告げ、同宿した筆者に翌朝のクリストとの朝食をセットしてくださった。最初の原美術館での会見同様、計画の進展状況や芸術における布の歴史を、再び芸術家自身より伺うことができた。

1995 年、東西冷戦時代の終焉から 6 年目を迎えたベルリンでは、世界中から集まった人々が国会議事堂を取り囲み、屋上からクライマーがチームとなって純白の布を下ろすのを喝采して見守った。興奮は夜もさめやらずの観があったが、議事堂横の（東ベルリンから壁を越えて自由圏へと逃亡を試み、背後から射殺された）若者たちの白い十字架の前で、静かに黙想する人も少なくなかった。

ニューヨークにはベルリンの時と同じく、事前調査の旅・一週間の実地見学を行っていた。そこは、留学時代の長い夏休みを美術館探訪で過ごした、胎動期の前衛作品の記憶が充満する都市だ。40 年を経て、心新たにクリスト夫妻の作品と向き合うことになった。

ニューヨーク市を成す五区の一つマンハッタン島のほぼ中央に、セント・パトリック寺院とロックフェラー・センターに挟まれた五番街が南北に伸びる。それを約 10 丁北上すると、セントラル・パーク南東の角にぶつかる。その角には、五十九丁目を隔ててプラザ・ホテルが建ち、約 800 メートルの幅を持つ公園の南西角は、ブロードウェイと交わるコロンバス・サークルである。この一帯は、セントラル・パーク・サウスと呼ばれる。公園の反対側、セントラル・パーク・ノースは、そこから北上すること約 50 丁の百十丁目に当たる。

クリストとジャンヌ＝クロードの作品『ザ・ゲイツ、セントラル・パーク、ニューヨーク・シティ 1979-2005』は、公園全域に及ぶ。否、公園

そのものの作品化だ。＜門＞を成すサフラン色の特製の布と支柱は、7500 本。高さは一律に 4.87 メートルであるが、幅は 1.67～5.48 メートルと、全長 37 キロメートルに及ぶ設置場所（遊歩道）の状況に応じて変動がある。

2 月 11 日ニューヨーク到着後、空港からメトロポリタン美術館に直行し、総ガラス張りの記者会見場に入る。テレビカメラが林立する後部に対峙して、壇上にはクリスト夫妻が、ブルームバーグ市長や市・警察・公園の関係者等と着席し、順次挨拶に立つ。一様に、晴れやかな表情だ。

ガラス越しに見える＜門＞は、既に設置が終わり、上部に内蔵した布を開くばかりだ。会見場を出て、連なる門のトンネルの中を心浮き立ち歩を進める。葉を落とした木々や、なだらかに起伏する芝草の中に点在する氷河期の巨石を縫って朱色の門がひた走る。公園は、作品が撤去される 2 月 28 日前日までの 16 日間、夜明けから午前 1 時まで開放された。毎夜、友人宅の 33 階の自室から、白く凍てついた湖面や弧を描いて立ち並ぶサフラン色の列柱の中を静かにパトロールする車の動きを、飽かず目で追っていた。

次の作品は、既に公表されている「オーヴァー・ザ・リヴァー」である。先年、芸術の森での講演後、関係者に促されるまで質問に応じていたクリストの誠実さが思い起こされる。

＜かとう・くにこ 1964 年、米マリアン大芸術学部卒。75 年以降独立して欧米各地での国際展の審査と作家推薦、国際会議及び祝典への招待参加、講演等多数。欧州の文化財団顧問。著書「ヌーベル・タピスリー」（共著・仏文）「手に触れる永遠」（英和両文）ほか＞

この原稿は札幌宮の森美術館で 10 月 29 日から 2007 年 1 月 14 日まで開催する「クリストとジャンヌ＝クロード 1958-2006 展」にちなんで執筆していただいた。

彫刻美術館で出合った本郷新の希少美術品「打つ」

囲碁天元戦の優勝者に贈った記念品は今どこに

望田 武司

本郷新の代表作の一つ「石狩一開拓者慰霊碑」が建つ石狩市の石狩浜で6月30日、恒例の「初夏の石狩浜に『石狩』の像を訪ねる会」が行われた。本郷の命日は2月13日だが、この時期石狩浜は厳冬期、地吹雪で道が埋まってしまうことや、参加者の高齢化などの理由で、数年前から気候の良い、札幌彫刻美術館開館記念日の6月末に美術館の主催で行われている。

催しには本郷の次男で俳優だった故・淳さんの夫人で俳優の柳川慶子さん、柳川さんの次男で、本郷の孫に当たる本郷弦さん（無名塾所属）らが駆けつけた。毎年夏になると被爆体験をつづった朗読劇「この子たちの夏」の公演で、全国を駆け回っている柳川さんにとっては4年ぶりの参加だったという。

「石狩一開拓者慰霊碑」は自然の猛威や人間社会の矛盾によって縛りつけられた開拓民を「罪なき人々」と捉えているという。本郷が中近東旅行で目の当たりにした多くの罪なき生活者の犠牲と、辛苦を重ねた北海道開拓者の魂をオーバーラップさせて布で全身を巻きつけ、もだえ苦しむ姿を表現したものと言われている。本郷は開拓時代を思わせる荒涼とした石狩浜こそこの作品の場所にふさわしいと、この地への建立を強く望んでいた。1周忌のときに遺骨は分骨され「石狩一開拓者慰霊碑」の台座に本郷は眠っている。台座は北海道開拓の入り口でもある石狩川に上る船の形を模して造られている。

本郷の足跡を偲ぶため、彫刻美術館で作

品を鑑賞した。2000点ある作品を数ヵ月ごとに入れ替えているが、今回はあっと驚く作品を見た。「打つ」という題名の作品だが、題材は手。指の先を良く見ると、碁石をつまんでいる。プロの石のつかみ方をスケッチした本郷の絵も添えられている。この作品は1976年の作品で、本郷が依頼を受けこの年の囲碁天元戦で天元位を獲得した棋



士に記念品として制作したものだそうだ。

ちなみに、この作品が誰の手に渡ったのか家に帰って調べてみた。すると当時天元戦は創設されたばかりで、初代の藤沢秀行9段に贈られたことになる。藤沢9段ちょうど50歳のときである。藤沢9段は書道の大家であるが、彼に彫刻の関心があったかどうかはわからない。この記念品は今どうなっているのだろうか。おそらくこの種の彫刻の記念品は、他にはない相当価値ある希少美術品と言えそうだ。居間に飾ってあるのか、倉庫でほこりにまみれているか、それとも廃棄されてしまったか、他人にあげたか…。熱烈な囲碁ファンとしてはぜひ知りたいところである。

（観光ボランティア）

「空間に生きる一日本のパブリックアート」展に寄せて

札幌芸術の森美術館学芸委員 樋泉 綾子

札幌芸術の森開園 20 周年を記念し、札幌芸術の森美術館で「空間に生きる一日本のパブリックアート」展が開催中である。

日本のパブリックアートは、戦後の荒廃した日本の都市空間に潤いを与えることを目的とした公共空間への彫刻設置事業に始まる。こうしたタイプのパブリックアートの事業は現在まで継承されつつ、そのあり方は時代とともに変化を遂げて来た。ここ 20 年来、都市の再開発事業などで、場所性を象徴しアメニティ（便利さ）を高める手段として、多くのパブリックアート事業が試みられている。

景観に対する関心が高まり、都市・地域の再生が急務とされる近年、作家個人の表現という従来の芸術のあり方を超えたパブリックアートの公共性・社会性が、私たちを取り巻く環境を豊かにし、社会を活性化するものとして一層注目を集めている。

そこでは、単にオブジェの設置にとどまるのではなく、アートが都市計画、建築、ランドスケープ（景観）との協働により調和のとれた環境を創り出すこと、またポスト産業社会における環境再生などの役割を果たすことが求められている。

同時に、自治体、企業などの設置主体と作家、市民との緊密な関係を育てる参加型の作品制作プロセスを通じて、地域独自の景観形成や活性化に寄与するなど、まちづくりにおけるアートの創造的役割も注目される。

この展覧会では、丹下健三が手がけた広島平和記念公園からイスラエルの作家ダニ・カラヴァンの最新プロジェクトである室生山上公園芸術の森まで、1950 年以降の日本のパブリックアートにおけるいくつかの重要なプロジェクトを中心に、多くの示唆に富むパブリックアートの現状を模型や映像を使ったユニークな展示で紹介し、その意義を検証することを目的にしている。

また本展覧会は、次会場の東京・世田谷美術館のほか全国 5～6 会場で巡回予定であるが、札幌芸術の森美術館では、石山緑地や「彫刻のまち」旭川の取り組みなど、北海道のパブリックアートの優れた事例についても紹介している。

地域の社会環境を形成する上でアートがどのような役割を果たしていくことができるのか、これからのアートと都市の関係の可能性を探る好機として観覧してほしい。

札幌芸術の森開園 20 周年記念

「空間に生きる一日本のパブリックアート」展開催中

2006 年 10 月 1 日—29 日（会期中無休） 会場：札幌芸術の森美術館

オマージュ「無辜の民」

—「北の彫刻展に出品して」

艾沢 詳子

今年、早い時期に札幌彫刻美術館から「北の彫刻シリーズ」への出品依頼があり、従来の彫刻というカテゴリと自作の位置みたいなものをはっきり自覚していなかっただけに驚いた。

立体彫刻といっても、私が使っている素材というのが電話帳、ティッシュペーパーなど、紙が主体材料をなしており、ブロンズ、石などハードな素材の対極にあると言える。

もう、何年たつのだろう、白いあごひげがとても印象的でモダンな本郷新氏とレセプションでお目にかかったのは。その後、美術館がオープン、何度も「無辜の民」に会いに通う私がいた。当時、私は腐食銅版画をやっており、もし彫刻を続けていたらあの「無辜の民」の呪縛（じゅばく）は…

その時、私の求めている物すべてがそこに結実していたようなインパクトがあった。今、長い時を経て版表現を進めながらドローイング、ワックスワークと表現手段の広がりを改めて見ると、水脈のように「無辜の民」を見て感動した私が見え隠れしている。特にワックスワークは床を支持体にドローイングするという発想から生まれ、様々なパーツの集積で成り立っている。ただ1個体の制作プロセスは立体彫刻と言えるのではないかと思い、アシストも使えずたくさんの時間を費やすことになってしまったが、小さな焼けためざしのようなもろい個体は様々な表情を語り始め、単にドローイングのパーツに終わらず、自立した作品としてさらに発展していった。

25年という時間の流れを経て、今また「無辜の民」と向き合ってしまった。そして今だからこそオマージュ「無辜の民」が生まれてきたのでは。そんなわけで、また、気の遠くなるような制作だったが、とても不思議な時間を過ごしていた気がする。

（よもぎざわ・しょうこ、美術家）

札幌彫刻美術館「北の彫刻展」を見て

高橋 淑子（会員）

今回の4人の作家による「北の彫刻展2006—感性を刺激する素材の魅力」という副題通り、小林重予の自然とガラスの融合、中江紀洋の菌形と流木の組み合わせ、檜原武正の錆びていく釘、そして艾沢詳子のワックスワークと、私達が日頃感じている彫刻のイメージとはかけ離れた素材を用いた作品で、新たな時代を感じさせるものだった。井上みどり学芸員の解説も分かりやすく、多くの方に聞いてほしかった。

艾沢の作品は、ワークショップにも参加し、直接、その成り立ちについて聞くことができたので、「無辜の民」のマイナス・イメージを優しく包み込むような白い棺を思わせる作品を楽しめた。本郷新の「無辜の民」がそこに加わり、札幌彫刻美術館で「北の彫刻展」を開催する意味を発見。できれば、今後も屋内外で本郷新の作品を生かした展示を見たいと欲が出た。（敬称略）

*同展は10月9日まで札幌彫刻美術館で開催

第7話 生きている本郷新

7月16日の北海道新聞32面の「朝の食卓」に思いがけず本郷新が登場した。釣り好きの本郷新が網走の能取岬に設置するオホーツクの漁民像の下見に来たときに、しばしのカレイ釣りを楽しんだ話で、ご覧になった方もいることだろう。

私が美術館に顔を出すようになってからもう10年以上になるが、本郷新の実像を知るにつれ、「これほど北海道を愛した作家だ、この作家の作品は北海道にもっとあるはずだ」と思うようになった。

というのも、本郷新が彫刻家として自立できるとの自信を持ったのは、日高の荻伏村（現浦河町荻伏）から胸像3点の制作を依頼されたからで、本郷新はこのとき得た資金を元に東京・世田谷にアトリエを建てている。この像は今でも健在でかつて友の会で訪れたこともあった。

このように若いときに地元から注文があったということは、それ以外にも制作依頼があっただろうから、美術館の記録になくても作品は存在するはずだと思い、探してみようと思い立った。そして、そのもうひとつの狙いは、幅広く作家や各界の有名人との交流のあった本郷新だが、その交流記録はまったく公表されていない。新たな作品を見つけることはそれに伴う別の面から見た人間本郷新を見いだせるのではないかと思ったからだ。

そんな思いを持ちながら歩き出して2年

目、その考えは的中した。ある日、余市町でニッカウキスキー工場の構内にある竹鶴正孝像を見つけ、作家は誰かなと思って背中に回って探したらサインは何と本郷新？目を疑って何度も見直したことを今でも鮮明に思い出す。うれしかったと同時に本郷と竹鶴の親密な交友から、さもありなんと納得した。

その後、苫小牧の田中正太郎先生像（文化会館内）、幕別町の岩永右八像（役場前）、新篠津村の野村中三郎像（役場前）と続き、去年は滝之上町で町功労者の朝倉義衛像（芝桜公園）を見つけ出し、現在5点になっている。

しかし、今の「知られていない作品を見いだす」だけでは目的の半分。できたら本郷新の人間味ある話も聞きたいと、3番目の幕別町で見つけた時から思い切って関係先を訪ねて話を聞くことにした。訪問先はいずれも役場だが、飛び込みの訪問者を温かく迎えていただき、町史をコピーしてもらうなどした。

しかし、本郷新と直接会ったことのある人に出会うことはできず失望していた時にこの道新の記事。「ああ、まだ間に合う」と希望を持った。

本郷新はこのとき、「戦って苦しみ、血を流す。これは表現者として避けられない」と言ったという。もっと話を聞きたいものだ。

抜海の目

もうひとつの本郷新展

今、作品「北の岬」(道立近代美術館所蔵)の前にいる。朝から曇りだが降りそうにもない。降雨予想 10%、それではと思い立って芸術の森の散策にした。いつものとおり美術館を見てレストランへ。気が向けば野外彫刻コース。

福井爽人展、日本画としてはもう少し繊細さがほしいなと思いつつ時計を見ると入館して一時間半が過ぎている。構図も色調も素晴らしい。いつもは一時間ぐらいだが、今日は絵と話し合う時間が長かった。

工芸館をのぞいてレストランに向かう。階段を上ろうと案内板の前を通りすぎたとき、ふっと気になる文字が目に入って引き返した。何と「僕たちの本郷新展」とある。場所はセンターロビー。にわかに興味がわいて急ぎ足になる。

センターに入るとその先は一段高くなっていて、その奥の一面に立体の像らしきもの、絵、そして商品などが置かれている。札幌・石山小学校 5 年生の作品だ。ぐるっと回ってみる。確かに本郷新の作品を模したもののようだ。紙と布で作った「わだつみ像」らしきもの、「無辜の民」らしきもの、その他ごちゃごちゃ。

はじめは小学校 5 年生の子供たちがよく造ったなと思って見ていたが、見ているうちに何か込み上げてくるものを感じた。いったいこれは何なのだろう。少なくともこ

こは公的な美術館のロビー、小学校の教室ではない。どうしてここにこんな紙と布の作品と称するものが展示されたのだろう。ここを訪れた人はこの本郷新の作品を模したのを見てどんな感じを持つことだろう。

子供に美術の関心を持たせること、美術の体験をさせることがとても重要なことはよくわかる。しかし、それが一人の作家の作品を集団で模倣するとなるとこれは問題だろう。教育の目的と方法が合致していない。それに作家は自分の作品が模倣されることをどう思うだろう。多くの作家は「大変結構です」と受け入れるのだろうか。

ましてや本郷新は、今はいない。その本郷新の心を伝えなければならないのは本郷新の作品を護持する美術館だ。そしてわれわれはその札幌彫刻美術館の友の会の会員なのだ。これを見て本郷新が笑うのか、怒るのか、泣くのか知らないが、少なくとも本郷新を敬愛するわれわれ支援者が、泣きたくなるようなことはやめてほしいし、あってはならない。

改めて言うが、この展示が公的な場所で行われたこと、制作に美術館の黙認があったとしか思われたいことは問題だ。

われわれの本郷新への尊敬と愛情、そして作品への賛美の思いがこれで大きく傷つけられた。これをどう償っていけばいいのだろう。

野外彫刻の洗い方教えます 講師を招いて実習

友の会のビデオ撮影進む

友の会が取り組んでいる「野外彫刻と街角の美を守ろう」ビデオ制作のための野外彫刻清掃作業が9月11日、札幌・大通公園で行われた＝写真＝。

作業は大通西2丁目にある「花の母子像」を対象に行われ、会員ら10人が参加した。講師の彫刻家・小野寺紀子さんの指導を受けながら、水をかけたあと、中性洗剤をつけたタワシやブラシで洗浄、さびの出ているところは力を加減しての細かい作業。25年前に設置されたというブロンズ像は酸性雨や鳥の糞などで汚れがひどく、台座部分は磨き粉を付けたタワシでこすり、金属のへらでこそげ取る根気のいる仕事だった。水洗のあと拭き取り、ワックスをかけて丁寧に拭き取り、約2時間の作業を終えるとブロンズ像はやっと輝きを取り戻し、聖母のようによみがえった。

(田中 和子・会員)



友の会の提言

札幌市が募集した「みんなで考える景観づくり」に対して友の会が「野外彫刻と街角の美を守ろう」運動から下記の提言をしました。

「もっと美しいまちへ」

国際文化都市札幌には、歴史を映す貴重な野外彫刻が400点余りも設置されている。しかし、その多くは、周辺の電柱、電線、看板、自転車などによってせっかくの芸術作品のイメージが大きく損なわれてしまっている。観光・文化をうたうには、少なくともヨーロッパや北米の文化都市と同様に電線の地下埋設と電柱、看板、放置自転車の撤去などの大幅な環境整備が必要である。

さらに、これらの中には排気ガス・酸性雨による腐食や鳥の糞による汚れなどによって芸術の香りも失せ、無残な外観をさらすものも多い。文化都市の品格を保つために、頻繁で本格的かつ永続的な清掃・補修が不可欠である。芸術文化のシンボルとして都市空間を際立たせる野外彫刻をいつくしみ美化することは札幌市と市民の誇りであり、また責務でもある。

06年9月4日

札幌彫刻美術館友の会会長 橋本 信夫

展覧会

◆ 佐々木けいし展

11月1日—30日 ギャラリーどらーる
(札幌・中央区北4西17 ホテル・どらーる1F)

編集後記

▼今回もたくさんの方に原稿をいただき、何とか17号の編集を終えました。土岐学芸員の「野外彫刻調査の雑感」での指摘は友の会が取り組んでいる「野外彫刻と街角の美を守ろう」キャンペーンの基本にかかわる問題だと思います▼本郷新が囲碁天元戦に贈った作品「打つ」の原稿は執筆はか多くの方の多大なご協力でご掲載することができました▼「ギャラリーシリーズ」は休載しました。(大内)

彫刻美術館友の会 会報「いづみ」No.17

2006年10月1日発行

〒064-0954 札幌市中央区宮の森4条12丁目

財団法人札幌彫刻美術館内 Tel・fax: 011-642-5709

発行人 濱 久子

編集委員の連絡先: 斎藤美年子: 011-643-7246

濱 久子: 011-893-5212